<書評論文>

新しい普遍主義

Immanuel Wallerstein, *European Universalism: The Rhetoric of Power.* (The New Press, 2006)

ミロシュ・デブナール

1 はじめに

現在、世界には大きな変化が起きているということは事実であろう。社会学だけではなく社会科学全体では、この変化の本質をつかまえよう、この変化の要因やインパクトを説明または理解しようとしている研究が数多くある。世界システム論で有名なイマニュエル・ウォーラーステインは長い間この論争に貢献し、本書でも自分の世界システム論の結果や近代世界システムに対する批判を生かし、ウォーラーステインらしいともいえる、近代資本主義的な世界システムについての総括的な見通しを提供する。しかし、本書のタイトルの『ヨーロッパ的な普遍主義――権力の修辞学』が連想させるように、本書は著者自身も大いに影響を与えた一般の「グローバル化」理論と違う観点から現在の世界や次世代の可能性について議論する。著者はここで、我々が普段疑わないものを疑い、我々の世界を支配している権力者の行為を正当化する観念について批判的な議論を展開する。

2 内容紹介

本書は、「はじめに」に続いて4章から成り立っている。本稿では、簡単に内容を紹介してから、それぞれの章をまとめ、最後に本書について考察する。

まずは、「はじめに」で話題となる普遍主義を定義し、本書の課題を定める。普遍主義というのは、現在の世界における権力者（特に米国と英国）の政策や方針を正当化する基準になっているものであり、この基準は次の3つのパターン で主張されている：（1）

「『人権』と（中略）『民主主義』を保護する」（p.14）こと、（２）西洋文明の優位性、（３）ネオ・リベラル的な経済に対する代替の不在[1]。しかし、このような普遍主義は一方的で「偏頗でゆがんだ」（p.14）普遍主義にしかならない。このことを明らかにするのは、本書の１つの課題である。加えて、このような「ヨーロッパ的な普遍主義」（European universalism）に対して、偏りのない、よりバランスのとれた普遍主義、つまり「普遍的普遍主義」（universal universalism）を追求することが２つ目の課題となる。そして、この２種類の普遍主義の争いが現在の世界システムの危機[2]の中で激しくなり、その結果が次の世界システムの方向を定めることから、これらの課題の重要性を主張する。

２－１　第Ⅰ章「介入の権利はだれのものか――野蛮に対する普遍的価値」

第Ⅰ章ではほじめに、ヨーロッパ的な普遍主義の形態としての「介入の権利」について議論し、現在の資本主義的な世界システムを代表するヨーロッパ文明の拡大とそれの正当化についての倫理的な論争を考察する。世界システム論と同様に、この議論も「長い16世紀」と呼ばれている時期からはじまる。16世紀のはじめから、コロンブスの発見がアメリカの略奪を導き、このような行為を正当化する必要性が生じた。本章ではそれに対する当時の言説がラス・カサスとセプルベダという、２人の神学者の論争を事例にして論じられている。ラス・カサスはもともとスペインの宣教師であり、インディオの奴隷化に反対してアメリカにおけるスペインの政策の改善を求めた。それに対して、セプルベダはインディオの奴隷化とスペインの政策を支持した。インディオの自然な野蛮さ、犯罪と罪を起こした彼らを罰する必要性、潔白な人を護る必要性と伝道の促進という４つの理屈はセプルベダの論拠であった。これに対するラス・カサスの論拠はより詳しく説明されているが、簡単にまとめてみれば、「野蛮」という表現ないしカテゴリーの相対性、裁判権の問題、最小被害の原則などであった。

続いて著者は、このような論争には当時からさほど変化がないと主張する。「16世紀の神学者の２人の論拠を、私がここで時間をかけて説明しているのは、それ以来この論争に著しい追加はないからである」（p.11）と彼はいう。19世紀の植民地時代でも同様であったし、最近の旧ユーゴスラビアの戦争やイラク戦争でも理屈は同じだったといえる。もち

[1] この３つのパターンは後者の普遍主義の形態に直接に関連しているというよりも、権力者はどのように普遍的な価値を主張しているかを意味する。

[2] 現在の資本主義的な世界システムの危機、それの要因や現状については、例えばWallerstein (2004) を参照のこと。

ろん、世俗化が進むと、キリスト教に基づいた理屈が応用できなくなるから、キリスト教の代わりに19世紀に「文明化の使命」、20世紀に「人権」と「民主主義」の言説が登場する。しかしここでもまた、16世紀と同様に、セプルベダの理屈がラス・カサスの理屈を克服[3]してしまう。このような傾向は権力を握っている政治界の中だけではなく、介入の権利（または介入の義務までも）を支持する非政府団体でも見られる。ここで筆者は、セプルベダの理屈、つまり現在介入の正当化の基準になっている理屈に対してラス・カサスの論拠を応用し、イラク戦争とコソヴォ戦争のケースで検証をする。著者はこの事例でも示されるように、介入の権利を正当化する理屈には矛盾や他の問題点が数多くあり、「介入の権利は、強者によって適切なものとされてしまっているが、実際には正当化し難い権利である」(p.27) という。第Ⅰ章の終わりでは、上記の問題と価値の問題の関連を示す。

> しかし、このような（介入の権利の）曖昧さは、介入者の価値を普遍的な価値として認めるという枠組みに収まるものである。このような普遍的な価値が、ある世界システムにおける支配層の社会的な構築物であることを観察できれば、論争点がより根本的に広がる。基準になっているものはグローバルな普遍主義ではなく、ヨーロッパ的な普遍主義であり、（中略）支持者の多くに自然法と呼ばれているものである。潔白と呼ばれている人の人権保護と同時に物質的な搾取を正当化するものである。道理的に曖昧な教義である。(pp.27-28)

2－2　第Ⅱ章「ひとはノン・オリエンタリストになりうるか――本質的特殊主義」

第Ⅱ章では、普遍主義の次の形態として「オリエンタリズム」について議論し、オリエンタリストにならないような方法について考察する。ヨーロッパは新大陸発見時代に、前章で挙げられたインディオ以外に「高度文明」と呼ばれている文明（特に中国、インド、ペルシアとオスマン帝国）にも接触した。この文明はインディオと異なり、官僚制度に基づいて、共通語とそれによる自分の文字と文芸、（キリスト教と違う）大きな宗教と相当な富裕を持った文明であった。だから、インディオのように野蛮人と呼べない、それよりヨーロッパに近い文明であったといえる。

しかし、インディオと同様に、この文明がなぜヨーロッパの支配下に置かれるべきであるか、つまりヨーロッパがなぜこのような文明より発展しているかを説明する必要があった。「モダニティ」という概念は、ヨーロッパの優位性を説明する論拠になった。このモ

[3] セプルベダとラス・カサスの論争はインディオとアメリカにおけるスペインの政策についての会議のために行われ、この会議の結果は当時のスペイン王への助言となるはずであった。しかし、会議の結果が得られなかったため、セプルベダの勝利になったといえる。

ダニティを生み出すこと、または獲得することが出来たのは、（ギリシャ―ローマに由来する）ヨーロッパの文明だけであり、「モダニティは定義によると真の普遍的価値、つまり普遍主義の実現化であったため、道徳的善だけではなく、歴史的必然性でもあった」(p.33)。これは植民地時代におけるヨーロッパの支配を正当化する理屈になり、上記の文明を研究課題にするオリエンタリズムという学問の基礎でもあった。

続いて、特にサイードの著書の『オリエンタリズム』を取り上げ、このようなオリエンタリズムに対する批判を通して、サイードが要求した大きな物語への帰還によって生まれた課題について考察する。この課題は、著者が始めに提唱した「ひとはノン・オリエンタリストになりうるか」という課題に繋がっている。ラディカルな相対主義や「反ヨーロッパ中心主義的ヨーロッパ中心主義」（サイードの言葉で「オクシデンタリズム」[4]）のような方法[5]がこの問題の解決になれないことを示し、新しい世界システムには知の再構造化が必要と主張する。「二項対立、特に普遍なものと特殊なものの区別を具体化したのは現在の世界システムである」(p.48) のに対して、新しい世界システムでは「我々には特殊を普遍化すると同時に普遍を特殊化する必要がある」(p.49) という。

2－3　第Ⅲ章「どのように真実は知られるか――科学的普遍主義」

第Ⅲ章ではオリエンタリズムに続いて、「科学的普遍主義」という近代世界システムにおける普遍主義の形態について考察する。この普遍主義は、オリエンタリズムと違って、「あらゆる現象をいつでも制御する客観的法則を主張する」(p.51) 普遍主義である。しかし、このような「最後で最強のヨーロッパ的な普遍主義――科学的普遍主義――はもう疑いのないものではない」(p.70)。

まずは、この普遍主義の形態も世界システムの枠組みにおかれてこのシステムを支えている基柱だともいえるので、世界システムの危機[6]から説明が始まる。著者は、現在の資本主義的な世界システムの原理になっている無限の資本の蓄積が不可能になっていると指摘する。なぜならば、生産の費用（人件費、原料費と税金）は全て上昇し続け、剰余価

[4] オリエンタリズムないし東洋主義 (Orientalism) の反対として「オクシデンタリズム」ないし西洋主義 (Occidentalism)。

[5]「対ヨーロッパ中心的ヨーロッパ中心主義」とヨーロッパ中心主義自体の詳細な説明に関してはWallerstein (1997) を参照。

[6] 本書では 世界システムをシステムとして紹介し、世界システムの危機の原因を簡単にまとめている。世界システムのより詳細な説明、またはこのシステムの働き方と危機についてはWallerstein (2004) を参照すればよい。

値を獲得することが出来なくなっているからである。この上昇を抑えようとしたのはネオ・リベラル的な政策であったが、この政策も生産の費用の上昇を完全に抑えることは出来なかった。

続いて、他に世界システムの文化・知的な基柱になっているのは知の構造であり、著者はこの知の構造の次の３つの側面に注目する：（１）近代の大学制度、（２）「２つの文化」[7]の分離、（３）社会科学のもつ特別な役割。著者は、３つとも19世紀に構築されたものであることを示し、現在では３つとも危機にさらされていると指摘する。この危機のきっかけになったのは、他の著者の論文でもよく現れている1968年の「世界革命」であり、それ以降から次の変化が起きた。

・大学制度の規模が大きくなりすぎ、資本主義的な経済における市場の一員になってしまった
・「２つの文化」の分離を疑い始めたカルチュラル・スタディーズと複雑性研究が現れた
・社会科学における分類が複雑になり、社会科学のそれぞれの分野の境界がより不明確になってしまった

近代世界システムだけではなく、それを支えて正当化する、科学的な真実に基づいている科学的普遍主義も危機にさらされている。この科学的普遍主義は厳密に知の構造と繋がっており、この「知の構造は、近代世界システム全体と同様に、無秩序と分岐の時代に突入しており、そしてその帰結は全く非決定論的である。」(p.70)

２－４　第Ⅳ章「観念のパワー、パワーの観念――差し出すことと受け取ること？」

まずは、著者が指摘しているように、「永続的に支配制度を安定させるためには、優位的、圧倒的な権力ですら足りない。権力者には、支配による利得や特権をある程度正統化する必要が常にあった」(p.71)。近代世界システムでは、この正統化する役割を果たしていたのは、上記の３つのヨーロッパ的な普遍主義の形態であった。16世紀から主流であっ

[7]「２つの文化」というのは、哲学ないし人文科学と科学ないし自然科学の分離を意味する。この分離の根拠は、科学しか「真実」を調べることが出来ないということである。他方で、人文科学の役割は「良い」ことと「美」(good and beautiful) だけを追求することになる（つまり、人文科学は「真実」を調べられない)。しかし、この分離は以前には存在しなかったことは重要である。

た介入の権利または「セプルベダ系の正当化モード」が不十分になってから、それの変形とも呼ばれるオリエンタリズムが登場する。しかし、この「本質的な特殊主義」であるオリエンタリズムも支配を正当化するモードとして不十分になり、「科学と人文科学の認識的な分離」に基づいた科学的普遍主義が20世紀に主流になった[(8)]。ただし、前章でも指摘したようにこの普遍主義の形態も弱くなっているといわざるを得ない。

したがって、筆者はここで、本書の2番目の課題である「ヨーロッパ的な普遍主義をどのように乗り越え、(中略) 普遍的普遍主義に達することが出来るか」(p.79) という問いに対して、答えを追求する。普遍的普遍主義を「社会的リアリティの本質主義的な記述を拒否し、普遍なものと特殊なものの両方を歴史化し、いわゆる科学的認識と人文学的認識を1つの認識に再統一し、強者による弱者への「介入」の正当化に対する冷静でまったく懐疑的な眼差しを可能にする」(p.79) 普遍主義であるというように見做し、これを追及する過程[(9)]の中で「知識人」[(10)]の重要性を主張する。著者によると、「知識人は、3つのレベルで活躍している：分析者として真を探る、道徳的人間として善と美を探る、政治的人間として真を善と美と統一することを目指す」(p.80) 者である。このような活動を行う知識人が現在の知の構造に従わないため、彼らの評判が悪くなる可能性が高いかもしれないが、大きな変化が起きている現在の世界においては、世界システムを分析し続けて新しい (世界システムへの) 道を探す必要がある。著者によれば、今後の世界には次の可能性がある。

> 「普遍的普遍主義のネットワークに類似した複数の普遍主義の時代が一つの可能性である。それはサンゴール[(11)]がいう受取と差出の合流点のような世界になる。(中略) 他に考えられる可能性は、ヒエラルキーの強い、不平等主義的な新しい世界であり、この世界が普遍的な価値に基づくと主張するが、人種主義と性差別主義が我々の実践を支配し続け、それが現在の世界システムより激しくなる可能性が高い。」(p.84)

3 考察

著者は限られたスペース (100ページ弱) で見事に包括的で奥が深い議論を提供する。

---

(8) ただし、前述の二つの形態がもう有効ではないというわけではない。第Ⅰ章と第Ⅱ章でも本章でも、それぞれの言説が現在でも使われている事例があげられている。

(9) この過程では、前著で提案した「世界システム分析」という方法を使う必要があるとも主張する。

(10) その中でも特に社会学者の役割が重要であると主張する。

(11) セネガルの詩人、哲学者、政治学者。セネガル共和国初代大統領だったが、フランスとの繋がりも強かった。そのため、ウォーラーステインはサンゴールを「現代の完璧なハイブリッド」と呼んでいる。

もともと講義[12]であった本書で取り上げられた課題は確かに簡単に纏めて解決できる問題ではないが、著者は説得力のある議論を展開し、自分の論拠を学術的に裏付けている。

しかし、現在の権力者を支えてきた「ヨーロッパ的な普遍主義」の代案として普遍的普遍主義を提案するのは十分であろうか。もちろん、筆者によると、この新しい普遍主義には、「我々には特殊を普遍化すると同時に普遍を特殊化する必要があり、（中略）これによって新しい止揚が得られ、当然にこれ（止揚）が即座に疑われ始める」（p.49）という特徴がある。そして「複数の普遍主義」を求めているので、ヨーロッパ的な普遍主義と同じような概念ではない[13]といえるかもしれないが、このような新しい普遍主義もまた依然として「普遍主義」であるだろう。言い換えれば、次世代ないし新しい世界システムの権力者の行為を正当化するモードが、もしまた普遍主義の新しい形態になれば、本書と同様に批判が出来るのではないだろうか。理論的な問題というよりも、単なる言葉遣いの問題に過ぎないのではないかと思われるかも知れないが、私がここで疑問を呈したいのは、「偏頗でゆがんだ」普遍主義を訂正しようとする時に、ラディカルであるとよく言われているウォーラーステインもまた普遍主義を提唱しているという点である。このような考察は、本書で批判されているラディカルな相対主義と同じようなものに聞こえるかもしれないが、そうではない。ここで述べておきたいのは、普遍主義に基づいている現在の社会の代案を考察するため、普遍主義と（ラディカルな）相対主義という二分法的な枠組みを越えた概念を考える必要があるのではないかということである。

21世紀に入ってから、戦争が相次いで起こったり、特に今年からの世界経済の状況が悪化したりし始めている中で、現在の世界（著者の言葉で「近代世界システム」）が危機にさらされていることを否定するのは難しいだろう。いうまでもなく、我々の社会の中でも大きな変化が指摘されているが、この変化が全てポジティブな変化であるとは一概に言えない。この中で、ウォーラーステインは、経済的、政治的、社会的な問題をそれぞれ別々で議論したり、新しい世界システムのためにそれぞれの分野における対策を提案したりするよりも、それぞれが全体でどのように密接に繋がっているかを明確に示してから、この制度（世界システム）を支えている原理として普遍主義を疑う。しかし、現在の普遍主義はどうしてヨーロッパ的な普遍主義になっているのだろうか。著書では、いわゆる長い16世紀から、世界を植民地化し始めたヨーロッパ人は権力者として支配の権利を正当化する

---

[12] 本書は、2004年の「世界のパースペクティブ」というブリティッシュ・コロンビア大学の講義を纏めたテキストである。

[13] つまり、ヨーロッパ的な普遍主義と違って、1つの文化ないし1つの文化の価値観に基づいている普遍主義ではなく、複数の観点すなわち文化から得られた普遍主義であるといえるだろう。

ために、このような普遍主義を作り出したことは詳細に議論されているが、そもそもヨーロッパ人になぜ世界を克服できるような権力があったかが議論されていない。もちろん、これはある程度著者の世界システム論で説明できるかもしれないが、この課題からなぜヨーロッパ的な普遍主義が変形しながら現在まで世界システムを支えている基柱となっているかという問いが導かれる。つまり、支配を正当化するために「権力者の伝達ベルトとしての幹部のかなり大きな部分とともに、少なくとも被支配者の一部をも」(p.74) 納得させる原理として普遍主義はどのように彼らを説得できたのか、なぜ約500年間持続できたかということであろう。普遍主義はどのようにまたはなぜこのような人々を納得させられたのか、このような人々はなぜ現在のヨーロッパ的な普遍主義を疑わない[14]のか、という問いに対して答えを追求するのは、本書の目的の対象外に見えるかもしれないが、社会構造の中で普遍主義の作用を詳細に理解せず[15]にこの普遍主義を変えることが出来るのだろうか。

これに関しては、著者は現在の専門家の代わりに、2つの文化の分離を超えた「知識人」[16]の重要な役割を指摘する。ただし、現在の知を生産する大学制度の中でこのような知識人を育成することが出来るだろうか。そうでなければ、どこでいかに育成できるだろうか。このような問いは、普遍主義のような複雑な話題をマクロレベルで考察するときに表れる具体的またはミクロレベルの問題点の一部にしか過ぎないだろう。だが、ここで指摘しておきたいのは、普遍主義のような課題をマクロレベルで包括的に纏めても、この普遍主義を改善ないし訂正しようと思うときには、具体的な対策またはマクロレベルでの分析が必要になるということである。

要約すれば、本書は現在の普遍主義の形態（いわゆるヨーロッパ的な普遍主義）に関するすべての問題点を取り上げ、包括的な解決方法を提供している著作ではない。ただし、これは本書の目的ではないとも言わざるを得ない。それよりも、本稿で指摘したような疑問を思い浮かばせ、普遍主義という我々の世界の主な原理について考えさせることができるという点が、本書の意義ではないだろうか。換言すれば、本書の指摘や主張の全部に賛成できなくても、我々が普段疑っていない、前提として考えていることに対して深く考えさせることが本書の目的ではないだろうか。もちろん、本書は包括的で最終的な解決方法を呈示するものではないが、このような考察に対して重要な基礎を提供し、これからの新

---

[14] 本書が示しているように、現在のヨーロッパ的な普遍主義を誰も疑っていないことは一概にいえないが、疑っている方がまだ比較的に少ないとはいえるだろう。

[15] ここでは、著者がこのような作用を理解していない指摘ではなく、本書では普遍主義が如何に社会の中で作用しているかが取り上げられていないことを指摘したい。

[16] 知識人は専門家と違って1つの分野だけではなく、より学際的な学者であるともいえる。

しい世界システムを考えるための重要な出発点である。

参考文献

Said, Edward W., [1978]1995, Orientalism, New York: Vintage Books.（＝1986，今沢紀子訳『オリエンタリズム』平凡社.）

Wallerstein, Immanuel, 1997, “Eurocentrism and Its Avatars,” *New Left Review,* 226 (November-December) : 93-107.

———, 2004, *World-System Analysis: An Introduction,* Durham: Duke University Press.（＝2006，山下範久訳『入門・世界システム分析』藤原書店.）

(Miloš DEBNÁR・修士課程)

編集委員会注：本書評論文脱稿後に、本書の日本語訳が出版された。イマニュエル・ウォーラーステイン（山下範久訳）『ヨーロッパ的普遍主義——近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』明石書店、2008年.